

# 江戸の粋を再び! 幻の織物青梅縞

～ 明治初期に姿を消した青梅縞きもの現代に蘇る ～

## ●幻の織物青梅縞

青梅縞は、江戸初期にインドから日本に輸入された綿織物をまねて青梅で織られ始めた「青梅棧留縞」が起源とされています。

たて糸に綿と絹を、よこ糸には綿を用いた縞柄の織物で、江戸後期頃には流行の最先端をいくおしゃれ着として一世を風靡しました。

当時日本は「\*奢侈禁止令」により庶民が絹を身につけることは許されませんでした。表向きは綿織物でありながら密かに部分的に絹を織り込んでいることや、そのツヤ消し風の独特な風合い、小粋な縞柄などが江戸庶民の趣向にマッチし、将軍家の奥女中にまで人気広がったということです。

しかし、明治に入ると合成藍による代用品や粗悪品が出回り、その後明治中頃に途絶えました。

※奢侈禁止令 (しゃしきんしれい)

江戸幕府が贅沢の禁止のために発した命令で、着るものでは階級により素材や色などが制限された。

## ●青梅縞の復元と新たな青梅縞きもの

青梅の染色業村田染工株式会社(0428-24-8121)代表の村田博氏は、10年以上前にたまたま現存する青梅縞の資料に出会ったことをきっかけに調査を重ね、昨年この幻の青梅縞を120年ぶりに復元しました。

そして、「復元するだけでは意味がない。平成の粋なきものとして現代の人たちに着てもらいたい。」という

思いから、新たな青梅縞きものづくりに着手し、当所ではデザインの開発を担当しました。

## ●コンピュータによるデザイン開発

復元された青梅縞は、たて糸の地部分に藍染めの綿糸を、縞部分には梅やヤマモモなどの植物で染められた絹糸を用い、よこ糸には綿糸のみを用いて織られています。

綿と絹の糸の太さの違いにより、たて糸には部分的に隙間が生じるため、生地に透け感があります。

また、縞の配列によっては隙間の透けた部分が縞柄の一部として見えます。(図1)

たて糸の配列、綿と絹の組み合わせ、配色などをCGによりシミュレーションし、新たな青梅縞のデザインとして展開しました。(図2)

## ●市場開拓と今後の展開

同社では作成したデザインを元に新たな青梅縞着尺を試作し(図3)、「壺草苑青梅縞」として展開しました。

現在様々な展示会に出品するなど市場の開拓を図っており、今後さらに市場性などを踏まえた新製品の開発を進める予定です。

事業化支援部 <八王子支所>

藤田 茂 TEL 042-642-2778

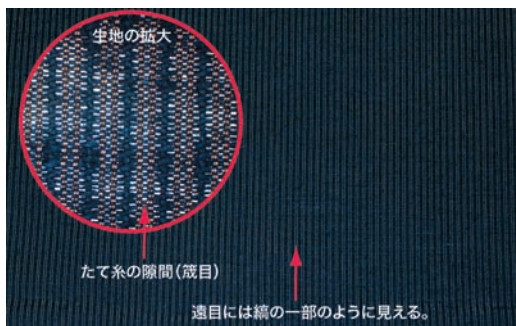


図1 たて糸の隙間による透けた部分と縞柄

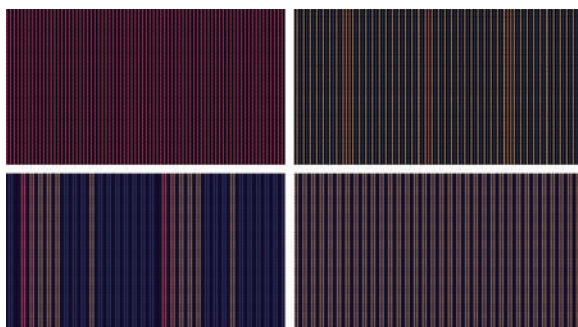


図2 CGによるデザインシミュレーション



図3 試作した青梅縞の男物きもの